

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成30年6月3日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26285121

研究課題名(和文) デジタルメディア時代の政治的公共性とナショナリズム

研究課題名(英文) Political Public sphere and Nationalism in age of Digital Media

研究代表者

伊藤 守 (ITO, Mamoru)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：30232474

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の狙いは、ソーシャルメディアの登場以降の言論空間の変容を明らかにすることにある。従来、新聞やテレビが社会的な言論の生産と流通を担ってきた。しかし、一般の市民が自由に意見を発信できるメディア環境が構成されることで、言論空間の構造が大きく変容したと考えられるからである。研究から、モバイルメディアというソーシャルメディアのマテリアルな特性がユーザーの身体とより深くつながり、情動を触発する「情動的ネットワーク」となっていること、情報が「交換価値」として同じ価値をもつために、フェイクニュース、噂、感情すらも情報として拡散できる環境が公共的空間に対する負のインパクトを与えていることを指摘した。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is to clarify the transformation of discourse space after Traditionally, newspapers and television have been responsible for the production and circulation of public sphere. However, The structure of the discourse space has undergone significant transformation by constituting a media environment where public citizens can freely give opinions. Research shows that the material characteristics of social media as mobile media are more deepening the link with user's physicality, becoming "affective network" to inspire emotions, As individual information has the same value as "exchange value", I pointed out that environments that can spread fake news, rumors, and emotions as information also have a negative impact on the public space.

研究分野：人文社会情報学、社会学

キーワード：情報 ソーシャルメディア 情動 コミュニケーション資本主義 公共性

1. 研究開始当初の背景

(1) ソーシャルメディアに関する研究は理論と実証共に急速に進展しつつある状況にあり、Tiziana Terranova(2005)、Jodi Dean(2010)、Alexander R. Galloway(2007)など海外文献を中心にリサーチを行った。

(2) 公共性の変容、ナショナリズムに関する研究は国内外を通じて多数に上り、これらの研究とソーシャルメディア研究との接合が重要な課題であった。とりわけ、本研究で主要な参照軸としたのは、Brian Massumi(2002, 2014, 2015)、Bernard Stiegler(1994, 2004)、Giorgio Agamben(1990)である。

2. 研究の目的

(1) 第1は、ソーシャルメディアのメディア特性を明らかにすることである。とりわけ、Twitterの特徴を解明することにある。

(2) ソーシャルメディアはTwitter、Facebook、LINEなど、グローバル企業によって運営される。資本主義経済に組み込まれたことによる傾向(bias)、その下での社会的機能とその特徴を明らかにすることも必要とされる。

(3) デジタルメディアと接合された人間の欲望や意識やアイデンティティの生成変化を解明することが最も重要な課題である。

(4) 公共性の変容、ナショナリズムやポピュリズムの台頭に関しては、研究分担者の関心に合わせて、それぞれ特定のフィールドからアプローチすることで、実証的に明らかにすることにした。そこで、研究分担者の毛利嘉孝はロンドンオリンピックとメディアというテーマからナショナリズムを再考する、水嶋はデジタルメディア環境における個性と集合性の関係性という視点からナショナリズムを考察する、阿部はソーシャルメディアによるコミュニケーション・モードの変容からナショナリズムを分析する、というそれぞれのユニークな視点と課題からアプローチを加えた。

3. 研究の方法

(1) 基本的に国内外の文献に示された知見を参照する文献研究を重点的に行い、それぞれが研究会で報告した。

(2) それぞれの研究分野における聞き取り調査やフィールド調査を実施して、文献で得られた知見とフィールド調査からの知見を照らし合わせて検証を行った。

以上の、2つの方法からアプローチした。

4. 研究成果

(1) ソーシャルメディアの特徴として、そ

れがモバイルメディアであることを看過できない。移動中に操作することが基本であり、メディアと情報と身体とのインターフェイスがこれを基軸に組織されていることを重視すべきである。

(2) (1)の特性はアクセスする情報の「短文化」「注意喚起力の強化」「瞬時のレスポンス可能な操作性」というメディア特性と接合する。

(3) 次々に更新される情報を小型スクリーンに表象するメディアはユーザーの身体的関与度を高め、情動を触発する触媒として継続的に機能する。精神分析学の概念を用いるならば、高速で循環する情報のフィードバック・ループにアクセスするユーザーを「駆り立てる力(drive)」は欲望からむしろ欲動へと変容している、との仮説を提示するに至った。

(4) 個々の情報へのアクセスや写真・メール等の個人情報の発信は、ユーザーにとって「使用価値」として意味をもつが、企業側にとってはアクセス数自体が経済的価値を有するものであり、個々の情報が虚偽・フェイクであるか「真実」であるかは考慮されない。メディア公共性にとってこうした経済的基軸が決定的な影響を及ぼしている。すでに「ポスト真実」の時代、フェイク・ニュースの時代と言われる事態が生まれているが、それはネット・ユーザーの悪意や意図に記されるべき問題ではなく、アクセス、転送、リンクされる数の多い情報が価値を生み出す現在の情報経済機構に起因することを銘記しなければならない。

(5) ユーザーが発信した情報は収集・蓄積・解析されビッグデータとして企業活動に活用されると共にユーザーに対しても「レコメンド」としてフィードバックされる。その情報の循環回路のなかで、ユーザーは人格的な意味づけを失い、パタンA、パタンBといったカテゴライズされる「分人」へと変換される。それは、アガンベンが「なんでもあれかまわないもの(whatever being)」と概念化した存在のあり方でもある。そこでは、他者とコミュニケーションを通じて「共有=コモン」する感覚や、ある集団に帰属するという感覚が極端に後景化していく事態であり、それは個人をナルシズムへと後退させる機構が前景化した姿でもある。

(6) (5)で指摘した傾向は、逆説的にソーシャルメディアを通じた他者との関係の「つながり」や「承認」への欲求を昂進させつつ、ユーザーに対する同調圧力として作用する一方で、ナルシズム志向を抱えた「分人」がナショナリズムやポピュリズム的運動へ同一化する機制を強化させることにもつながる。

(7) 現在のナショナリズムやポピュリズムをめぐる問題、公共性の「解体」にかかわる問題は、他の様々な要因との関係を視野に入れて考察されるべきだといえ、デジタル

メディア環境が引き起こす(5)(6)(7)の機制が強く作用している。以上、いまだ仮説の域を出ないが、各国で広がりつつある「右翼的」なポピュリズムの運動や社会意識の強度、さらにナショナリズムへの傾斜の動向は、コミュニケーション資本主義(Jodi Dean)と言われる資本主義の変容とそのもとでのコミュニケーション・モードの変化を相関していることを明らかにした。今回の研究から得られた知見は以上のとおりである。

なお、上述の研究分担者との共同研究の成果は、『デジタルメディア環境における政治的公共性の変容』(仮題)東京大学出版会から2018年度に刊行を予定しており、すでに草稿を研究会で報告し、修正の作業に入っていることも申し添えておきたい。

参照文献

Alexander Galloway and Eugene Thacker(2007) *The Exploit*, University of Minnesota Press.

Brian Masumi(2002) *Parables for the Virtual: Movement, Affect, Sensation*, Duke University.

Brian Masumi(2014) *What Animals Teach Us About Politics*, Duke University.

Brian Masumi(2015) *Omtopower: War, Powers and the State of Perception*, Duke University.

Jodi Dean(2010) *Blog Theory: Feedback and Capture in the Circuits of Drive, Polity*.

Jodi Dean(2009) *Democracy and Other NeoLiberal Fantasies: Communicative Capitalism and Left Politics*, Duke University.

Bernard Stiegler(1994=2009) 『技術と時間 1』法政大学出版局

Bernard Stiegler(2004=2006) 『象徴的貧困』新評論

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 10 件)

Mamoru ITO, 2017, "Die japanische Gesellschaft und Medienkultur nach dem 11.März 2011. pp.265-277 査読無

伊藤守, 2016, 「デジタルメディア時代の言論空間：理論的探究の対象としての制御、情動、時間」『マス・コミュニケーション研究』89号、pp.21-43、査読有

伊藤守, 2014, 「社会の地すべりの転位：コミュニケーション的地平の変容と政治的情動」『現代思想』Vol.42. No.16. pp48-58 査読無

Yoshitaka Mori, 2018, *Affective Labor*,

creative Life and the Condition of Cognitive Capitalism, *Asia Review*, Seoul national University Asia Center, pp.91-104 査読有

毛利嘉孝, 2017, 「新しいメディア理論に向けて」『5 - Designing Media Ecology』Vol.7. NO.2, pp.22-41 査読無

毛利嘉孝, 2014, 「スチュアート・ホルの「声」：ある有機的知識人の実践」『思想』1081巻, pp.66-70 査読無

毛利嘉孝, 2014, 「理論化の前でホールに語り掛ける」『年報カルチュラル・スタディーズ』2巻, pp.6-11 査読無

水嶋一憲, 2018, 「加速派政治宣言」『現代思想』Vol.46. No.1. pp.176-186 査読無

水嶋一憲, 2015, 「加速と隷属」『現代思想』
Kiyoshi Abe, 2015, *Ulrich Beck and Japan, Theory, Culture and Society*,32(7-8), pp.172-185 査読無

水嶋一憲, 2014, 「転位しつつけるプロジェクトのために」『思想』1081巻, pp.18-41 査読無

〔学会発表〕(計 5 件)

Mamoru ITO, 2017, *Media Power and Japanese Society in Post-Media era, Japanese Studies After* 3.11, *Japanologie, Universität Leipzig*

伊藤守, 2017, 「メディアと記号の情動的解釈項から考えるポピュリズム、カルチュラル・スタディーズ学会シンポジウム報告

Yoshitaka Mori, 2017, *Social Media and the Emergence of Digital Subject*, 2017 Annual Conference of Digital Media Studies.

Yoshitaka Mori, 2017, *Politics of Life and Place: Youth and Social Movements in Japan*, *Inter-Asia Cultural Studies*.

Kazunori Mizushima, 2017, *Into the <platformative situations>*, *East Asia Media Studies Conference*, Harvard University.

〔図書〕(計 6 件)

伊藤守, 2017, 『情動の社会学～デジタルメディア時代におけるミクロ知覚の探求』青土社

ハラルド・マイヤー、西山崇宏、伊藤守編、2018, 『ドイツとの対話：3.11以降の社会と

文化』せりか書房

伊藤守、岡井崇之編、2015、『ニュース空間の社会学』世界思想社

毛利嘉孝編、2017、『アフターミュージック：実践する音楽』東京藝術大学出版会

Kiyoshi Abe, 2015, *Surveilling and Securing of Olympics: From Tokyo1964 to London 2012*, Palagra.

伊藤守、毛利嘉孝編、2014、『アフターテレビジョン・スタディーズ』せりか書房

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 守 (ITO Mamoru)
早稲田大学教育・総合科学学術院・教授
研究者番号：30232474

(2) 研究分担者

水嶋一憲 (MIZUSHIMA Kazunori)
大阪産業大学経済学部・教授
研究者番号：20319578

毛利嘉孝 (MORI Yoshitaka)
東京藝術大学・教授
研究者番号：70304821

阿部 潔 (ABE Kiyoshi)
関西学院大学社会学部・教授
研究者番号：90242156

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()